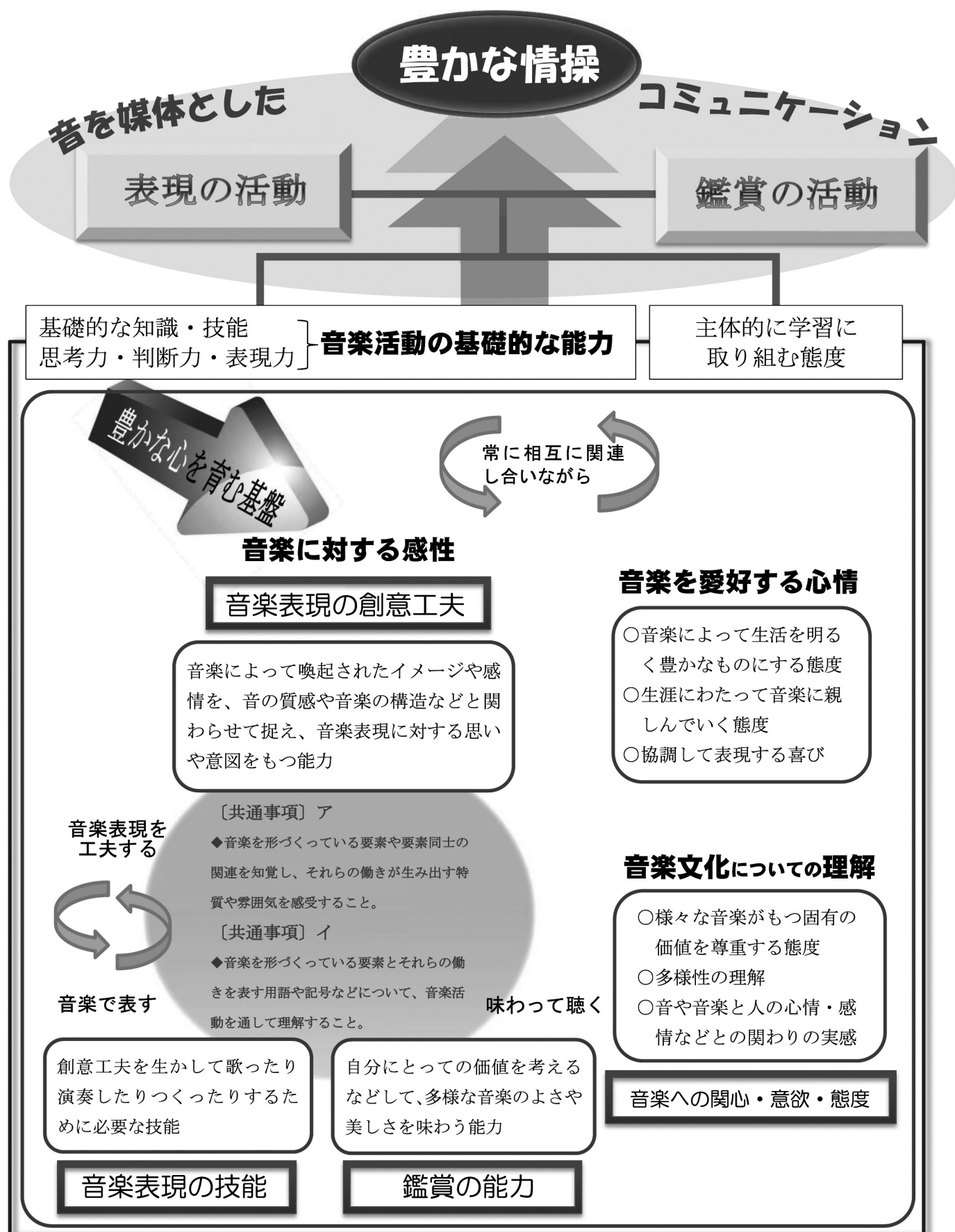


音 楽 科

音楽科の本質



音楽科の本質

中学校学習指導要領の音楽科の目標に「感性を豊かにし、(中略)豊かな情操を養う」とあるように、音楽科は情操教育に大きく関わっている教科である。

情操：美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心。情緒などに比べて更に複雑な感情。

豊かな人間性を育むためには、理性的な判断力や合理的な精神だけではなく、美しいものに感動するといった柔らかな感性が必要である。歌唱、器楽、創作の表現活動や鑑賞活動を通して、「生きる力」の中でもとりわけ「豊かな心」を育成していくことに、音楽教育の意味と目的があるといえる。

「豊かな心」を育む基盤となってくるのが「音楽に対する感性」である。「音楽に対する感性」とは、音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取るときの心の働きを意味している。音や音楽を知覚し感受するときに、生徒の音楽に対する感性が働くことから、音楽表現を工夫する、音楽で表す、味わって聴くすべての音楽活動の支えとして〔共通事項〕が位置付けられている。表現活動では音楽で表すことと音楽表現を工夫することを往還しながら、感性を豊かにしていくことになる。

音楽科で付けるべき力

学力の三要素のうち、音楽科では基礎的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等をまとめて音楽活動の基礎的な能力としている。左図では音楽活動の基礎的な能力、主体的に学習に取り組む態度と付けたい力の関係性について縦列で対応させて図示した。

これらの力を本校紀要総論で示してある21世紀型能力の図1に当てはめて考えてみると、創意工夫を生かして音楽表現するために必要な技能、すなわち「音楽表現の技能」が「基礎力」に当たる。左図では明記していないが、「歌詞の内容、楽曲の成立背景、作詞者や作曲者、我が国や郷土の音楽文化、生活の中の音や音楽の働き等に関する知識と曲想との関わりの理解」、「発声、器楽の発音の仕方や奏法に関する知識」、「音楽的な特徴や楽曲の構造と曲想との関わりの理解」等も基礎的な知識として背景には存在している。それらの知識・技能を使い、さらに深く考えていく「思考力」の部分は、「音楽表現の創意工夫」と「鑑賞の能力」の部分で示した力である。

総論の図1「実践力」の中には、自律的活動や関係形成が含まれている。これらを音楽科で付けたい力で考えてみると、音楽を愛好する心情の中に含まれる資質はまさに自律的活動につながるといえよう。また、音を媒体として他者（友人だけではなく、作曲者や演奏者も該当する）とコミュニケーションを図っていくことが音楽活動であることを考えると、関心・意欲・態度をはじめとした情意に関する資質が、音楽科における「実践力」であるといえる。

音楽科の本質に迫る授業づくり

前述の通り、感性を豊かにしたり情操を養ったりしていくためには、音や音楽によって生徒の心が動く瞬間を授業の中でどう仕組んでいくかが重要となってくる。歌を歌うこと、楽器を演奏すること、音楽をつくることによって心が動き、また音楽を聴くことによって心が動く、つまりは「感動」に近い感情が生まれるような授業を目指していきたい。表現の活動では、だんだんできるようになる実感を伴わせたり、自分の思いや意図がだんだん音楽表現となっていく実感を伴わせたりすることが、感動体験につながっていき、鑑賞の活動では、鑑賞曲を聴いてよさや美しさを感じながら、自分なりの価値の創造をしていったり、他者と事実の共有や感受の共感をする中で価値を認め合ったりすることが、感動体験につながっていくのではないかと考える。

生徒の心が動かなくても、音楽の活動は成立する。例えば、「ひたすらパート練習に取り組んでいる」「示された条件にしたがって、音符を並べている」「じっと黙って音楽を聴いている」などがそれである。もちろん授業のある一場面において、このような生徒の姿が見られることはあるし、そのような活動が必要な場合もある。しかしそれでは本質に迫った授業とは言い難い。生徒自身が本時や題材の学習を終えた時に、“何を学んだか”“学んだことを今後はどう生かすことができるか”が実感できるような授業を目指し、実態に即した題材設定や学習課題の工夫、発問の工夫等に焦点を当てながら、授業研究を進めていきたい。

フレーズでも多様な捉え方や感じ方があるということに気付くことができ、他者の意見も参考にしながら自分なりの思いや意図の再構築ができると考えたからである。

1 Aメロ、Bメロ、サビ、副歌部、それぞれの思いや意図を工夫してみよう。(みんなの意見)			
1番	Aメロ (5-13小節)	Bメロ (14-22小節)	サビ (23-31小節)
歌詞から伝えたいこと	・「あなた」の大切さ ・いつもそばで支えてくれた ・決して一人ではない ・今こそ ・「あなた」は永遠の存在	・寂しい15分の静寂らしさ ・「あな」は私の心にいる ・景色が変わっても変わらない気持ち ・時間が経てばいいかな	・出会えたことへの感謝 ・「あな」の思い ・1年、10年先まで歩いていく力強さ ・友達を助ける ・これから一緒に歩んでいこう ・ずっと一緒にいたい
伝えたいこと	・大切な人へ、ありがとう、丁寧に ・静かに優しく、静かに ・優しく、あたたか、静かに ・優しく、あたたか、静かに ・優しく、あたたか、静かに ・優しく、あたたか、静かに	・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに	・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに
2番	Aメロ (5-13小節)	Bメロ (14-22小節)	サビ (23-31小節)
歌詞から伝えたいこと	・「あなた」が、今、ここに、今、ここに ・「あなた」が、今、ここに、今、ここに ・「あなた」が、今、ここに、今、ここに ・「あなた」が、今、ここに、今、ここに	・「あなた」が、今、ここに、今、ここに ・「あなた」が、今、ここに、今、ここに ・「あなた」が、今、ここに、今、ここに ・「あなた」が、今、ここに、今、ここに	・「あなた」が、今、ここに、今、ここに ・「あなた」が、今、ここに、今、ここに ・「あなた」が、今、ここに、今、ここに ・「あなた」が、今、ここに、今、ここに
伝えたいこと	・大切な人へ、ありがとう、丁寧に ・静かに優しく、静かに ・優しく、あたたか、静かに ・優しく、あたたか、静かに ・優しく、あたたか、静かに ・優しく、あたたか、静かに	・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに	・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに ・静かに、静かに、静かに
2 曲のどこが、かっこいいか、かっこ悪いかなど、どこか？			
・多くの人が1番や2番のサビと書いていました。Bメロの静寂の部分という意見も、なぜそこと書いたか、根拠を考えてみよう。			

〈生徒の意見を集約したワークシート〉

上記を見ても分かるように、ある一つのフレーズにおいても多くの異なった感じ方や捉え方、思い等があった。

(2) 歌詞に沿ったイメージビデオの作成

表現領域の授業では、「いかに上手に演奏できるか」ということを目的とし、必要な技能の習得に重点が置かれたトレーニング重視の授業に陥りやすい。パート練習で自分のパートの音が取れ、他のパートと合わせて歌うことができるようになってきた段階で、歌詞の内容や曲想へと視点の移して表現の工夫を行わせた。

第3次では歌詞の内容により共感を抱かせたいと思い、生徒の写真や情景写真を用いたイメージビデオを作成した。範唱のCDに合わせ、行事や学校生活の様子をフレーズに合わせて放映した。



〈イメージビデオのワンシーン〉

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 第3次で用いたイメージビデオを見た生徒からは、「映像と歌詞がリンクしていて、共感できた」「映像を見てこれまでの自分たちの歩みを思い出すことができた」などの意見が出た。ただ範唱を聴かせて表現の工夫を行おうとすると範唱と自分たちの演奏の比較に意識がいきがちであるが、自分たちの映像と一緒に鑑賞したことで、歌詞をより自分事として捉えながら、表現の工夫に取り組むことができた。
- ② 各々が記入したワークシートの意見をまとめ、共有させたことは、その後の表現を工夫していく活動にも有効に働いた。以下に例を示す。

●サビの部分 (23～31小節)

①歌詞から伝えたいこと

- ・出会えたことへの感謝
- ・友への熱い想い
- ・1年、10年先まで歩いていく力強さ
- ・これからも友情は変わらない
- ・ずっと一緒にいたい

②伝えるためにどう工夫するか (一部抜粋)

- ・「ずっと」の部分では気持ちをかみしめるように歌う
- ・明るい声で
- ・優しく語りかけるように
- ・強弱をはっきりと
- ・力強く
- ・1と10を強く

②のどう工夫するかでは波線部に示したように相反する二つの意見が出た。そこで、その二つの意見を実際に歌って試してみることにした。

1回目に優しく語りかけるような歌い方でサビの部分の歌ってみたところ、“あまりしっくりこない”“何だか物足りない感じがする”といった意見が出てきた。2回目は逆に力強く歌ってみたところ、“盛り上がりがある”“曲の雰囲気に合っている”などの意見が出た。

そこでそのサビの部分の強弱に着目するよう指示

した。強弱記号では *f* になっており、生徒はやはりサビの部分は強弱記号の指示にあるように *f* で歌うことで曲の雰囲気合った歌い方になると知覚・感受していたようである。

続けて、二縦線部「1と10を強く」について、教師から「1と10は両方とも同じ強さだろうか。」と発問を投げかけてみた。「1年の方がより今に近いから強いと思う」という意見と「10年先の方が、年月が長いからより強いと思う」という意見が出てきたので、これも実際に歌って体感させた。

「1年先も」の部分を「10年先も」より強く歌ってみた時には、違和感を覚える生徒が多数見られた。逆に、「10年先も」の方を強く歌った場合では、その表現に納得している生徒が多かった。

（2）課題

① イメージビデオは、歌詞により共感させるための手立てとして有効であるが、誰が作成するのか、何の目的で使うのか、どの時期に見せるのか、1時間の授業の中のどのタイミングで使用するのかなど熟考してから使用すべきであった。今回の実践では合わせて歌えるようになった時期に見せたが、合唱コンクールまであと数日といった時期に見せることで、練習中により高まった「仲間の大切さ」や「仲間との絆」を実感できたかもしれない。

② 合唱活動で個々の生徒がもった「思いや意図」をどう扱うかについては、指導者が題材の学習を通しておれなくようにしていかなければならない。合唱は指揮者、伴奏者、複数の歌い手が一つとなって音楽を創り上げていくものである。プロの合唱団や部活動における合唱では指揮者が音楽を創り上げていくのが正しいのかもしれないが、音楽科の授業においてはそうとは限らない。個々の生徒の思いや意図を大切にしつつ、指揮者や伴奏者も同じ方向性で一つの合唱曲を創り上げていかなければならないものではないだろうか。そうした時に、歌詞という視点から表現の工夫に迫ることも必要だが、強弱記号をはじめとする音楽を形づくっている要素について、「なぜ作曲者はこのような表現にしたのか」を追究

していくことで、楽譜に忠実に演奏するという一貫性をもたせた音楽の中にも個々の生徒が思いを乗せながら表現の工夫を行っていくことができたのではなかろうか。

③ 成果②であげた例としては、「10年先も」を実際により強く歌ってみることで表現に工夫を加えたが、これは言わば感覚的に感じ取って表現したにすぎない。楽譜上では「1年先も」より「10年先も」の部分の方がソプラノの主旋律の音高が高かったり、男声パートでは「10年先も」の方に跳躍音程が入ってきたりしており、その作曲法からも作曲者が「10年先も」をより気持ちを高ぶらせて歌ってほしいという意図が読み取れる。（下図）感覚的な表現にとどまらせるのではなく、音高や音程といった諸要素をアナライズしてみることで、作曲者の思いを理解することもできたことを考えると、「ソプラノの最高音はどうなっているか」や「男声パートの音程の幅はどれくらい離れているか」など、更に一步踏み込んだ発問をするべきであったように感じる。

ソプラノの最高音

(小音符は2回目)

7度の跳躍音程

「変わらないもの」M28～

【参考・引用文献】

- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成20年9月）解説－音楽編－』教育芸術社、2008年
- ・臼井 学「中学校音楽科が大切にしたいこと」富山県中学校教育課程研究大会（音楽部会）配付資料（平成27年10月）
- ・臼井 学「生徒にとって意味のある音楽の授業実践に向けて(2)」『中等教育資料（平成26年8月）』ぎょうせい、2014年